持国天立像

四天王の一人である持国天は、東の方角の守護神であり、剣を持ち、断固たる表情をしていて、世界および仏教の守護神としての役割が強調されている。剣はただの武器ではなく、ヴァジュラと呼ばれる儀式用の用具と関係がある。ヴァジュラは、先がいつくかに分かれた短い道具で、現世における幻想や妄想を切り裂く仏教の力を象徴している。持国天は、悶え苦しんでいる邪鬼の上に勝ち誇ったような様子で立っているが、これもまた、信者を惑わせる悪の影響に打ち勝つことができるという持国天の能力を象徴している。暴力や戦いの脅威がふんだんに込められたこのような表現は、現代の視点からすると高圧的なような感じを受けるかもしれない。しかしながら、文字が一般に浸透する以前は、このような外見は、自分では字を読むことができず、仏教の教義を理解することができない信徒たちに、仏教の教えやその実践の力を伝えるうえで、非常に重要だったのである。